

禪の友

Zen no Tomo

3

March 2019

特集
彼岸会





ご本山だより 大本山永平寺【山門前】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二



仏殿前の一点、梅蕾つぼみに輝く淡雪は彼岸の修行を励ましてくれているようです。早朝の掃除では、皆がわれを忘れてひたすらに廊下を磨いておりま

す。雑巾で前を拭く者のかかとを追いかけて、山門前でふと目を横にやると、そこに見えるのは入門を請う雲水の姿です。あの頃の自分と同じく、緊張して立っているその姿は、私たちに初心を思い起こさせ、また時の過ぎる速さと怖ろしさを教えてくれます。

さて、永平寺をお開きになられました道元禅師さまのおられる承陽殿の前には、自然石で造られた歌碑があります。七十三世熊沢泰禅くまざわたいぜん禅師さまが詠まれたお歌です。

「別れても吾わがゆくさきはほかになし
祖師のみ山の雪のふるさと」

これまでの約八〇〇年の間、多くのお祖師さま方も、永平寺の山門の前に立ってこられたのでしよう。どんな思いで一日一日をご修行なされたものかとお偲びいたします。

生まれた者は、老い、病み、死すものです。その中にはもちろん愛する者との別れもあるでしょう。それまでうんと大切にしたらからこそ別れが辛いのでしよう。天地自然の理は変えようがありませんが、別れのあるその中でどう安らかに過ごせるのか。吾が行く先は他になしと自らの脚下を顧みて、新到の雲水と共に日々、修行してまいりたいと願うものであります。



ご本山だより 大本山總持寺【道を求めて】

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一



現在、新しい修行僧が続々と上山してきています。これまで学生や社会人として様々な生活スタイルを過ごしてきた彼らですが、これからは一様に僧堂に起居して和合の精神で一心に辦道修行に励むのです。これを「発心」「発菩提心」といいます。

この「発心」のことを總持寺ご開山瑩山禪師さまは『伝光録』の中で「ひとたび憤発して深く契処あるべし」（しっかりと発心して進めば必ず得る処があるはずだ）とお示しになられました。

瑩山禪師さまのお示しは、叱咤激励の言葉として修行僧の胸に深く刻み込まれることでしょう。

さて、今年も三月九日（土）午後二

時半より大祖堂だいそどうで東日本大震災の復興祈願「祈りの夕べ」が開催されます。江川禪師さま大導師のもと犠牲者の供養と復興祈念の法要、また福島県安積黎明さかあけ高校合唱団、横浜市上寺尾小学校合唱団、神奈川県鶴見養護学校岸根分教室合唱団による復興祈念コンサートが行われます。

總持寺は、多くの参詣者とともに犠牲になられた方々の冥福と被災地の復興を願う祈りで終日包まれます。また夕方には救世ぐぜい観音像前で「万灯供養」が行われます。

十八日から二十四日までは春の彼岸会です。毎日施食法要が行われ、二十一日は江川禪師さまが大導師をお務めになられます。

選・坊城俊樹

子を抱く母ぞ眩しき七五三

山口県 粟屋邦夫

評 七五三のそれぞれの子どもの可愛さを詠った句はよくある。これは、その子を抱く母の美しさと、母となった強さに焦点をあてた句。確かにその姿こそが眩しく輝いているように見えるのを感じを持って詠いあげた。

ヘルン旧居に暇乞ひする雪女

島根県 藤江堯

評 ヘルンとは小泉八雲のことであろう。八雲は数々の怪談を作ったことで知られる。その旧居は松江の城のそばにあるが、そこに雪女までも暇乞いして逃げ込んでいるというユーモア。やや字余りだがそれも佳しとする。

◆ 手ぶくろの内に潜める感情線

兵庫県 内藤昭子

◆ 雪あかり生者も死者も眠らせて

新潟県 南雲いみ子

◆ 仏壇へそつくり移す菊畑

宮城県 鈴木喜久郎

◆ ストーブや紙縫こよりに綴ちる雑記帳

東京都 友野 瞳

◆ 母子草慈母観音に重ね見る

福井県 廣瀬しのぶ

◆ 子を胸に母のゆく日よ冬ぬくし

静岡県 清水康博

◆ 肩を出すハンペン沈めおでん鍋

東京都 長谷川 瞳

◆ 歳の市何か忘れて戻りたり

宮城県 鎌田登喜子

◆ ビル解体寒空叩く重機音

東京都 鈴木英治

◆ 義兄ねむる故郷の墓は木の葉雨

長野県 小平 紀恵子

選者吟

白鳥座かすめ雪崩れてくるといふ 俊樹

作句小見 実際には雪崩の季節である二月三月のころの白鳥座の位置がどこにあるのかは知らない。これはフィクションであって、雪崩れの白さと白鳥の白さを感じさせた句として吟味いただければ結構。

選・長澤 ちづ

おかつぱの額の好きな風の神 おみなご
風に向かつてはしる

福岡県 三吉 誠

評 おかつぱ頭の女の子が風に向かつて元気に走っている様子が目に浮かぶ。風の神に呼ばれたかのように自然に一体化した光景だったのだろう。風が暴力的に吹きまくっていたのではないことが上の句の表現から如実である。

もがりぶえ
虎落笛聞こえる夜半の蜂巢箱手を触れた
れば温き側板

茨城県 馬場 信一

評 虎落笛は冬の強風が電線などに吹きつけて笛のような音を出したもので、そんな寒々しい夜半、巣箱の側板に蜂の生命の温もりを感じている作者である。

◆ 未だ解かずかたむき残る稲架棒に冬至陽浴びて鴉たわむる
岩手県 穴戸さとる

◆ 寒空に襟を立てつつ背を屈め無人駅へと歩みはやめる
鳥取県 眞山博充

◆ 朝食の仕度より先頬かむり夜に降りたるざらめ雪掻く
岩手県 阿部 照子

◆ 肩に散る黄葉ひらり又ひらり箒を持ちて銀杏樹の下
山形県 齋藤 弥生

◆ ひっそりと行基ゆかりの薬師堂媪の姿朝に夕べに
兵庫県 下浦 正行

◆ 動物の誓え諾ひおもしろし「すずめの涙」「のみの心臓」
東京都 長谷川 瞳

◆ うぶすなの神おろがむと初詣人混みの中靴の音鳴る
山口県 中井 清子

◆ ふる里の山嶺に立つ時雨虹復興の人らに希望与えつ
東京都 鈴木 正作

◆ 糸を張るその都度破られ蜘蛛の智慧今朝は背丈の上には巡らす
静岡県 高尾 善五

◆ 木天蓼のからまる古木われが侘り白寿の姉は待ちて蔓取る
福島県 西木 甚

選者詠

感情の捌け口としての歌反古を捨てんと思いそして捨て得ず
ちづ

作歌小見 素直な気持ち詠って良いとは言え、出来たら詩として

昇華された一首にしたいもの。そのためには同じテーマで多作することだと思えます。いきなり納得のゆく歌は出来ません。多作して捨てる、拙歌はそれに抗う心の葛藤です。